別紙 4

報告番号	※　　第　　号

主　論　文　の　要　旨

論文題目　アルメニア語の非定形名詞修飾表現— 日本語および英語との対照を通して —

氏　　名　KLOYAN Luiza

論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、従来の言語類型論及び日本語学において存在する関係節構文に関する考え方の内、寺村（1992）の名詞修飾表現に関する知見、及び、Shibatani（2017，2018，2019）が提唱した「体言化理論」を中心に、言語類型論及び語用論を複合した観点から日本語や英語の名詞修飾表現と比較を通じて、アルメニア語の非定形名詞修飾表現の諸現象を包括的に捉え直すことを目的とした。

第 3 章では、まず、アルメニア語の非定形名詞修飾表現における分詞形が、Keenan and Comrie（1977）の提案した名詞句接近可能性階層において如何なる振舞いをするかを分析した。その結果、結果分詞が名詞句接近可能性階層において、最も高い生産性を見せており、「原因・理由」と「対比・比較」を表す奪格名詞句以外は、結果分詞による名詞修飾が問題なく成立することが確認できた。

主体分詞は、主名詞が「主語」である場合、「主語」が文脈から想定可能な受動文の場合、或いは「主語らしい」構文を形成している場合に使用される分詞であることが確認できた。

未来分詞の名詞修飾表現としての実現可能性に関して、主体分詞がカバーしていない格関係・意味関係においても成立することが確認できた。最も生産的なのは、主名詞が主格と与格の関係にある場合であり、それ以外の格関係に対しては、結果分詞に比べ生産性が低いということが分かった。

未来分詞IIは、本階層において主体分詞と同様な程度の生産性を見せており、その実現可能性に分詞が含めているモダリティ的な意味も強く関連していることが分かった。

第 4 章では、日本語の「外の関係」に対応する、アルメニア語の非定形動詞による名詞修飾表現を日本語の名詞修飾表現との比較を通じて検討した。そして、アルメニア語の非定形名詞修飾表現が日本語の名詞修飾表現とかなりの程度対応関係を見せていることが確認できた。

具体的には、日本語の「外の関係」の名詞修飾表現に対して、アルメニア語では、不定詞による名詞修飾表現がかなりの程度対応しており、特に、「内容補充」的な名詞修飾表現において、日本語の「トイウ」とアルメニア語の *masin* という要素の使用に関しても、両言語間に興味深い類似性が観察された。ただし、場合によっては、アルメニア語の不定詞による名詞修飾表現の成立において、修飾表現と主要部名詞の間に「直接的な因果関係」、「時空間的な隣接性」「アスペクト的な制約」のような制約が関わっており、不定詞による名詞修飾表現が不可能になるケースも観察された。

また、両言語の名詞修飾表現において語用論的な推論が果たしている役割の範囲について、アルメニア語の名詞修飾表現では、主要部名詞と修飾節の間に許容される意味解釈上の懸隔（ギャップ）の範囲が日本語よりも狭いということが明らかになった。

第 5 章では、アルメニア語の名詞修飾表現において非定形動詞が表す、いわゆる形容詞的な意味・用法について考察した。結果分詞の形容詞的な意味が成立する傾向として、(i) 結果状態の焦点化、(ii) 比喩的に発達した（慣用句的な）表現、(iii) 語彙化した表現の 3 種類が観察された。また、本動詞が非変化動詞の場合であっても、結果分詞の形容詞的な意味が成立する場合があるという点で、日本語の連体形動詞との相違点が確認された。

一方、日英語との相違点として、事態把握の観点から、動詞の「自・他」選択や、「受動態・能動態」の選択がどの程度関わるかを確認したところ、アルメニア語は明確にスル型言語的な振る舞いをするようなことが確認できなかった。

一方、主体分詞の形容詞的な意味が成立する傾向として、(i) 分詞形動詞が恒常状態・習慣を表す意味から主名詞の属性を表す表現へ発達した傾向と、(ii) 比喩的な表現として発達した傾向の 2 つの傾向が観察された。また、動詞の語彙的アスペクトや意味によって形容詞的な意味が制限されるような傾向は観察されなかった。

第 6 章では、アルメニア語のこれらの非定形動詞による名詞修飾表現を Shibatani（2017, 2018, 2019）の提案した「体言化理論」の観点から捉え直すことを試みた。その結果、ここまで見てきた分詞による名詞修飾表現と不定詞による名詞修飾表現は、それぞれ「項体言化構造（argument nominalization）」と「事態体言化構造（event nominalization）」に当てはまることが明らかになった。そして、従来の属格・所有表現を体言基盤体言化であると再分析し、用言基盤体言化（分詞、不定詞構文）は、体言基盤体言化をモデルに発達した用言基盤体言化であると主張した。

また、体言基盤の体言化構造の場合は属格接辞が体言化辞として機能しており、用言基盤（動詞語根）の場合には（日本語の動詞の連体形と同様に）分詞（PTCP）の形態素が体言化辞であることを明らかにした。この点において、不定詞形は通常の体言と同様な振る舞いを見せていることが明らかになった。

第 7 章では、アルメニア語の非定形名詞修飾表現（体言化構造）のテンス・アスペクト的な振る舞いについて再検討した。そして、個々の分詞形が表しているテンス・アスペクト的な意味は、分詞の形からのみ生み出されるものではなく、日本語の連体形動詞の「ル」形と「タ」形と同様に、動詞 （句）の有する特性、語彙的アスペクトや文脈によって与えられるものであることが確認できた。

特に、日本語の連体形動詞の「タ」形とアルメニア語の名詞修飾表現における結果分詞の対応関係については、テンス・アスペクト的な現れ方に関して、ほぼ同様な振る舞いをすることが明らかになった。ただし、三原（1992）の「視点の原理」に関しては、両言語間で平行的な現象が観察されなかった。

一方、主体分詞は特定の時制に縛られておらず、動作主体が表している行為をあらゆる時制的な領域において表せる形式であり、日本語の「テイル」形だけではなく、「ル」形や「テイタ」形にも対応している形式であることが明らかになった。

さらに、アルメニア語の未来を表す分詞形の意味的な相違について、未来分詞IIは、必然性や当為性を含意する未来分詞形であることが確認できた。